邱永漢自選集

天様は お料理がお好き

第10巻

邱永漢自選集 X
奥様はお料理がお好き
食前食後—漢方の話
昭和四十七年二月十日　発行

著　者　邱　永漢
発行者　徳間康快
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四の一〇の一
郵便番号　一〇五
電話（四三三）六二三一
振替　東京四四三九二

印刷所　株式会社清水印刷所
製本所　大口製本印刷株式会社
定　価　一三〇〇円
© EIKAN Kyū 1972, Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

0034-328449-5229

邱永漢自選集 X／目　次

奥様はお料理がお好き……9

1 持参金時代は過ぎた 11

2 生け花芸術と私たち 17

3 花からダンゴまで 22

4 手料理を礼賛する 28

5 父も夫も買出し係です…… 34

6 女房株の高いワケ 40

7 「奥様コック」を求む 46

8 さて、お見合いが決まり…… 52

9 短い春の出来事 58

10 結婚式の憂鬱 64

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

11 ひとりぼっちの……初夜 70
12 結婚街道の曲り角で 76
13 不思議な里帰り…… 83
14 若奥様はやっと誕生 89
15 私の選んだ奥様 95
16 良妻の条件 101
17 妻の抵抗 107
18 やりくりについて 114
19 恋愛学校の同窓会 120
20 私は死にたい！ 126
21 日本へやってきたが…… 132
22 炭一俵で一冬 139

23 ご馳走は誠意をこめて 145
24 一九五四年のメニュー 151
25 メニューは翻訳できない 158
26 基本的な調理法 164
27 料理と結婚すべし 170
28 女コックのご亭主 176
29 安い料理でも作り方次第 182
30 味噌汁の味 189
31 本当の味は骨にある 195
32 調理のドレミファ 201
33 ニンニクと恋愛 208
34 香辛料の移り変り 214

35 牛肉を炒める手ぎわで……220
36 まだ新しい日本人の〝家〟226
37 だれが豚でふとるか 232
38 だれにでもできる豚肉料理 238
39 すばらしいお料理……それは 244
40 仲人には美容食を 250
『奥様はお料理がお好き』あとがき 258
食前食後——漢方の話……261
栄養と営養 263

米と糠 267
強化米 272
糟糠の妻 277
うま味の正体 282
椎茸ばなし 287
ブラック・ペーパー 292
鶏の残酷物語 302
精力料理 307
茶碗蒸しの傑作 312
漢方という鉢 318
人間この精密機械 323
大根と蕪 328

クルミと耳鳴り 338
フカのヒレのこと 342
緑豆とスイカ 347
羊肉で一杯 352
ナスは涼食 358
胃病という職業病 363
安心のクスリ 374
カゼの季節 379
高血圧者の食べ物 385
賽先生と糖尿病 396
ヘビとリューマチ 407
月とスッポン 417

貧血病と金欠症 423
魚肚と田鶏 428
乳房はだれのもの 433
扶陽起衰の功 438
若く美しく 443
あとがき 449

装丁／原田 勤
写真／渡辺雅雄

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

奥様はお料理がお好き

1　持参金時代は過ぎた

愛情と持参金

十九世紀、文芸華やかなりし頃のフランスの小説を読んでいると、持参金のことが盛んに出てくる。なかでもバルザックは小説のなかに遠慮会釈なくお金のことを持ち込んで来た人で、彼の小説のなかの花婿候補者たちはたいてい、若い娘にどれだけの持参金があるかを盛んに気にしている。

男が女に示す熱情の尺度もお金なら、女の美貌を決定するのもお金――われわれがひそかに空想しているような純情無垢な恋愛からはほど遠い。これはフランス人がけちんぼだからそうなのか、それともお金がそういう働きをするからフランス人がしまり屋になるのか、そこのところはなかなか一筋縄ではいかないが、おそらくどちらも真実であろう。

お金に関心を持っているのは、もとよりフランス人だけではない。女の持参金に興味をいだいているのも、もとよりフランスの男だけではない。現に私自身、東京の学校を出て国へ帰ったとき、二十町歩の田畑つきのお嬢さんをもらわないかと縁談を持ち込まれたことがあった。いま、たんぼの一町歩がいくらぐらいするものか私は知らないが、あの頃はまだ土地改革などもなく、戦争直後のインフレでお米の値段もたいへんなものであったから、二十町歩は相当な財産であった。まったく興味がなかったなどといったら、私は見栄っ張りのうそつき野郎だろう。実は私は多大の関心を持っていたが、

残念なことに、当時、私はべつに思う人があって、二十町歩にはかえられないような気がしていたまでのことである。

その後、私がひそかに思っていた結婚はだめになったが、そのときには海外へ行くことばかり考えていたので、二十町歩といえども私を引き止めるだけの力がなかった。もし私が先にそのお嬢さんに会って、そのお嬢さんを気にいっていたら（といっても、向うもそうなってくれなければ成り立たない話であるが）私はまたべつの考え方をしたかもしれない。少なくとも二十町歩が百町歩でも財産が結婚のじゃまになるということは、まあ、私には考えられない。

結局、私は金銭的な結婚をしなかったが、のちに再び東京へ舞い戻ったとき、友人の一人が同じような問題で悩んでいたので、私はそんなことで神経を痛めつける必要はないよといって結婚を勧めたことがある。世の中における夫婦間の不和のほとんど大部分は金銭と関係があるけれども、それは夫婦のどちらかがお金を持ちすぎているか、もしくはあまりにも持たなすぎるかというだけの問題ではなくて、金銭問題を処理しかねることから起こるのであろう。したがって、トラブルは金銭があってもなくても起こりうることであって、どちらかといえば、有るは無いにまさる、というのが私の平凡な人生観である。

現代にも生きる「山内一豊の妻」

さて、「持参金」の結婚に占める地位は年とともにかげをひそめ、今日ではもはや十九世紀ほどで

はなくなっているが、「持参金的」物の考え方はまったく消え去ったわけではない。ことに女性が相手を選ぶ場合には、男の能力や履歴や家族関係や性格などを問題にする。なかでも、結婚生活を営んでいくだけの経済能力ありやということがいちばん重要視される。ただむかしは家柄や財産の比重が大きかったのに対して、今日は将来性をも含めて「潜在能力」が比重を増してきているから、その分だけ個人中心になったとはいえるであろう。この傾向を女性のチャッカリ気質に帰する考え方もあるけれども、だれしも離婚を予想して結婚するものはいないし、一生をともにするなら経済能力のある相手を選ぶのは当然であろう。家よりも個人を中心にして物を考えるようになったのは、結婚の概念が家中心から個人中心に移りつつあることを示すだけのことにすぎない。このことは男の側からもいえることであって、立身出世の手段として社長や上役の娘を嫁にもらうのは、今日といえどもむかしと変りなく、むしろ出世することの難しさがいっそうこのことを「願ってもない」ことにしているが、しかし、その場合でも男の願いは女の持参金をねらっているわけではなくて、有形無形の利益をあてにしているだけのことである。もっとも多くの女性は本能的にお金が結婚生活の潤滑油的役割を果たすことを知っているので、自分で働くようになると、わりあいによく貯金をするようである。

あるとき、新聞を読んでいたら、ビジネス・ガールがせっせと貯金をして、二、三十万円とまとまった金ができたときがいちばん危ないと書いてあった。働く女が、二、三十万円も貯金ができる頃には年齢も三十に近くなっている。それだけ貯金ができたということは、それまでのあいだにいい彼氏がいなかったということであるが、女も三十近くなると、そろそろ心にあせりが出てくる。そんなと

きに会社の同僚のなかに、昼食のソバ代を立て替えてくれないかなどという男が現われる。そういう男にかぎって、生活はだらしがないし、まだ結婚もしないでいる。このへんからはじまって、女が会社に預けてあるお金が少しずつおろされるが、彼女の恋愛生命は、その金が尽きたときとともに終わるというのである。もちろん、彼女は結婚のときのためにせっせとお金をためたのであり、したがって彼女がそのお金を使いはじめたのも、結婚を前提としている。けれども、結果はお金が仇になってしまうのである。

こういう実例が実際にどの程度あるかわからないが、もし彼女のためたお金を「持参金」と見立てるならば、持参金を持っているということは爆弾を抱いているようなものかもしれない。なにしろこの頃は世の中が平和になって、やたらに爆発したがっている男が多いから、爆弾を持っていることを知られると危ない。だから、爆弾を持っていないほうが持っているよりも安全なことになるが、しかし、それでは身を守る手だてがないという不安もある。だから、まったく貯金を持たず裸一貫を売り物にするわけにはいかない。とすれば、やはり「山内一豊の妻」流が最高であって、「持参金」はたとえ愛の言葉をささやいているときでもけっして口外すべきではないだろう。家に金があってもないフリをすれば、泥棒にねらわれないですむというものだ。

新しい花嫁修業

では、女性はお嫁にいくときは、なにを持って行くべきか。よく好きになったお嬢さんを「お嫁に

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c